

## 前口上 吉見俊哉とは誰か

吉見ゼミ 門下生有志

吉見俊哉とは誰か。たとえば、この本の著者略歴には、次のように記されている。

一九五七年東京生まれ。東京大学名誉教授、國學院大学観光まちづくり学部教授。東京大学大学院情報学環長、同大学副学長などを歴任。社会学、都市論、メディア論、文化研究を主な専門としつつ、日本におけるカルチュラル・スタディーズの発展で中心的な役割を果たす。著書に『都市のドラマトウルギー』『東京裏返し』『敗者としての東京』など。

これはもちろん、間違いではない。しかし略された部分に、いろいろある。そのため冒頭の

問いに対する答えとしては、不十分かもしれない。

まず、吉見俊哉が論じてきたのは社会、都市、メディア、文化にとどまらず、アメリカ、戦後日本、博覧会、テーマパーク、オリンピック、アーカイブ、そして大学など、さまざまなテーマにわたる。

次に、その著書は第一作の『都市のドラマトゥルギー』から三〇年あまりで三〇冊以上を数え、近ごろは年に数冊のペースで発表し続けている。さらに共著や編著をあわせれば一〇〇冊を超える学術書や一般書を公刊し、その多くが韓国語や中国語や英語などに翻訳されている。日本をはじめ東アジアの大型書店では、「吉見俊哉」の棚を見かけることもある。

そして、東大では副学長をはじめ情報学環長や東京大学出版会理事などを歴任し、学外では日本メディア学会など複数の学会で会長に選出され、ハーバード大学（アメリカ）客員教授、エル・コレヒオ・デ・メヒコ（メキシコ）客員教授、社会科学高等研究院（フランス）客員研究員などを経験し、文部科学省や文化庁や日本ユネスコ委員会などで多数の公職を兼務してきた。さらには「インターアジア・カルチュラル・スタディーズ (Inter-Asia Cultural Studies)」など国際ネットワークの創設や国際学術誌の編集委員なども担い、これら以外にも国内外で数々のプロジェクトや組織を主導してきた。

そうして関係者や門下生だけでなく、おそらく本人も、そのすべてを覚えていないほど、吉見俊哉は数多くのテーマを論じ、膨大な論考を多言語で発表し、さまざまな役割を日本も含めた世界の各地で演じてきた。

これほど多くの「吉見俊哉」たちを、なぜ吉見俊哉は、演じ上げてきたのだろうか——いたい、吉見俊哉とは誰か。

その答えを、吉見俊哉という個人の動機に求めても、あまり意味はないだろう。むしろ、あまたの「吉見俊哉」たちを社会的な出来事として捉えれば、ここで問うべきは時代に受け入れられ、ときに必要とされる数々の役を上演してきた、吉見俊哉の「まなざし」である。それを理解することができれば、今の日本社会の本質が、そして私たちの時代の本性が、もっと鮮やかに見えてくるだろう。なぜなら「吉見俊哉」という役とその上演は、吉見俊哉という一人の人物による独創とは考えられないからである。

「吉見俊哉」が社会的な出来事であり、時代が求めた役の名であるならば、その役が演じるドラマは、たとえば吉見俊哉の師である見田宗介（みわたむねすけ）をはじめとする、さまざまな同時代の人たちとの出会いや関係のなかで形をなしてきたはずであり、そしてある特定の「場」でこそ可能になったはずである。それは現代日本という「場」であり、その研究と教育の中枢に立つ、東大と

いう「場」である。

そうであるならば、現代日本という「場」は、そして東大という「場」は、吉見俊哉に対してどのようなドラマを可能にし、また不可能にしてきたのだろうか。それに対して吉見俊哉はどのように応じ、また抗い、折々のドラマを演じ上げていったのだろうか。そうして「吉見俊哉」のドラマトゥルギーは、いかに編み成されていったのだろうか。

二〇二三年三月、吉見俊哉は東大を去った。およそ半世紀にわたってさまざまな「吉見俊哉」を上演し、いよいよ定年を迎えてその「場」を退くとき、吉見俊哉はどのような「吉見俊哉」を演じ上げたのだろうか。そして東大は、その中央に位置する安田講堂は、その最終講義に対して、いかなるドラマを求めたのだろうか。

本書は、吉見俊哉が東大という舞台を離れるにあたり、その「まなざし」を明らかにすることを試みる。前半は、吉見俊哉とその門下生が主要テーマ（都市、メディア、文化、アメリカ、大学）をめぐる「特別ゼミ」をおこなない、「まなざし」の核心を把握することを目指した五つの章と、その前段となる序章を取めた。後半は、二〇二三年三月一九日に東大・安田講堂でおこなわれた吉見俊哉の最終講義「東大紛争 1968—69」を採録した。これが、東大という

舞台に立つ「吉見俊哉」の千秋楽である。

そうしてさまざまな「吉見俊哉」たちを上演してきた吉見俊哉の「まなざし」を立体的に描き出し、そのドラマトゥルギーの成り立ちを明らかにすることで、現代日本という舞台を、そして私たちの時代を生み成すドラマを、より深く理解することに本書は挑む。

吉見俊哉とは誰か。この問いに答えることは、ここではまだできない。ただし若き日の吉見俊哉を見守った見田宗介は、その初演へ寄せた「緒言」で、次のように記している。少し長くなるが、その引用から、本書の上演を始めたい。

学生時代の吉見俊哉は、骨格の大きい、しかも幾度もじぶんじしんをのりこえて変身をとげる理論の体系をつぎつぎと展開してみせる一方、シカゴ学派をはじめとする伝統的な社会学の都市理論を辛抱強く勉強し、同時に他方では、如月小春（このころ）と組んで劇団綺崎（きさき）を演出し、横浜ポトシアターの演出助手をつとめ、また生産技術研究所の原広司（はらひろし）のところで研究生として建築を学び、都市ホールの設計に関与したりしてきた。こういう吉見をわたしたちは、ホームランも打つが大ファウルも打つかもしれないルーキーの打席を見守るチーム・メイトのような気持で、みてきたと思う。今ここにこの一冊の仕事の中で、吉見の理

論的な構想力は、演劇と建築という、ふたつのマテリアルな領野の仕事を、じぶん**に必然的なものとして**、コントロールのよくきいた打球のように、内化している。

(見田宗介「緒言」、吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史』弘文堂、一九八七年)